

「平成」とともに起こった宗門問題の終焉 (3)

日頭が残した負の遺産に苦しみ続ける宗門

●自活できない三分の一の援助寺院は、統廃合されるしかない

「平成」の時代から「令和」に移った今、宗門は最悪の事態を迎えている。日頭は池田名誉会長に対する嫉妬から、「C 作戦」という謀略で創価学会を破門した。その結果、宗門の檀徒数は数万人となり、今や、約三分の一の末寺が自活できない「援助寺院」と化している。その数を二百としても、毎月 50 万円の支援を本山が負担すれば、ひと月 1 億円の出費になる。

援助寺院が増えることはあっても減ることはない。将来は、檀家の少ない寺院は廃寺にするか、近くの寺院と合併するしかなく、寺院数が減っていくのは明らかだ。

●宗門が抱える 3 つの問題

①折伏が進まない＝日如は号令を掛ければ、折伏ができるものと勘違いしているが、日本の若い世代が教条主義的で信徒を蔑視し、折伏や登山のノルマを課す、ブラック企業のような宗教に興味を示すはずがない。

②供養が集まらない＝檀徒が高齢化しており、年金で生活している者が多く、多額の供養をすることができない。また、檀徒は本山と末寺の両方に供養しなければならないので、負担が大きく、それが嫌で脱講する者が増えている。

③信徒が増えないのに、僧侶が増えている＝日頭が創価大学を真似して「法教院」という政府に正式に認められていない私塾を作った。その私塾を存続させるために、毎年、得度者を取り続けているため、本山の無任所教師が増え続けている。このままいくと、近い将来に僧侶の半数近くが、無任所教師となる。

●人材を潰すだけの「法教院」が宗門の未来を奪う

日頭の作った負の遺産の中で一番大きなものが「法教院」である。法教院が出来たため、大坊の高校生は一般の大学を受験するという目標がなくなり、学習意欲をなくしてしまった。大坊の延長でしかない閉鎖的な世界で、学生たちは授業をサボり、遊ぶことに専念している。多くの学生が留年し、卒業しても 1 割以上が不祥事で還俗、ワイセツ事件で逮捕された者もいる。未来の宗門を支える人材を、自ら潰しているようなものである。そのうえ宗門の財政を最も圧迫しているのも「法教院」の存在なのだ。

宗内の誰もがそのことに気づいているが、日頭がいる限り、日如も手を出せない。しかし、日頭に何かあれば、真っ先に「法教院」が問題となるであろう。

日頭は自分が中心の世界を作ろうとして、創価学会を破門した。「法教院」も同じである。創業者気取りで、作ったことに満足している。日頭の我欲が人材を潰し、宗門の未来を奪うのだ。誰かが声を上げないかぎり、日頭の作った負の遺産に宗門は苦しみ続けることになるであろう。

(以上)